北極圏に白鳥を訪ねて（前編）

日本白鳥の会・日本山岳会々員　本間一人（横越上）

本間さんは七月に白鳥の生息地調査のためシベリアに行って来られました。このたび訪問記が寄せられましたので、二回に分けて紹介します。

秋の天気のよい夜にコゥ、コゥと鳴き声を交わしながら白鳥がやってきて、寝ていてもその声に目が覚めることがある。

その白鳥の故郷を訪ねてみようと誘いをうけたのが昨年の暮れ、勤労者にとって半月にも及ぶ長期休暇は難しいことではあったが、上司や同僚の理解で実現することとなった。

七月一日新潟空港に各地から日本白鳥の会のメンバーが集結し家族や友人の見送りをうけハバロフスク経由マガダンに向かう。空港には現地案内人でロシア科学アカデミーのターニャ女史が出迎えてくれた。

ここからは双発の飛行機をチャータ。北緯六十度からいっきに北極圏の七十度まで飛ぶが眼下は広大な山岳地帯、そしてコリマ川の源流がくねくねと曲がり幾重にも三日月湖が重なりあって蛇行している様は何百年もの歴史を感じとることができる。途中チェルスキーで給油、目的地のチャウンを眼下に見ながらシュミットにむかう。海岸線は流氷でびっしり埋めつくされている、いよいよ北極圏だ。うきうきしながら空港に降り立つ。集落と空港は少し離れていてこのホテルはアエロフロートの直営らしい。さっそくカメラをもって周辺を写してるとチュコト人の親子の猟師にであった。ドーブルィ、ジェーニ（こんにちわ）と言うと返事がかえってきたがその先は何んだか分からない。遥か遠くにもう一人歩いてくる、どうやらその人が獲物のトナカイを担いでいることを言ってるらしい。

夕食後初めての白夜であるが明日からの行動のため床に入る。三日朝食をとりヘリを待つこと五時間位、ガソリンが足りない、この荷物が重いとか、結局はもっと金が欲しいと言う。そしてヘリに乗る前に事故の責任は取れないので、いっさいの補償を放棄させられた。

ようやく飛び立ち三十分位で下に白鳥が飛んでいるのを確認チュクチ山脈を越えると、東京湾の二倍はあると言うチャウン湾が広がり、広大な湿地帯がみえてくる。そして数えきれない湖沼、あとでどのくらいあるのか尋ねると十万プラス、マイナス一万とゆう返事であった。

ヘリが旋回しながら下降するとステーションが見えてきた。気温十七度ロシア科学アカデミー北方生物研究所チャウンステーションのマリーナ所長の家族、ゲナデー博士、二匹のハスキー犬、蝦の大群が迎えてくれた。今夜は我々の歓迎会である。

持参した越の寒梅を日本の最高の酒だと言うとウオッカ、ボルシチ、トナカイの肉様々な料理でテーブルはいっぱいになった。白夜なので夜の更けるのが分からないでいたが、十一時頃みんな上機嫌で床に入った。

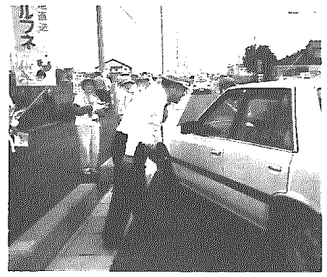
白鳥の巣を測る調査員

夏の交通事故防止運動　交通指導所を開設

八月一日から十日間行われた夏の交通事故防止運動の一環として、八月五日に国道四十九号線で交通指導所を設け、ドライバーに事故防止を訴えました。

指導所となった茜ケ丘ニュータウン前では、浅見村長はじめ新潟南署員や交通安全協会、交通安全母の会など約三十五名が参加。午後三時から約一時間にわたって通過する車を一台一台止め、ドライバーに安全運転チラシと交通安全母の会が作った手芸チューリップを手渡しながら「交通安全」を呼びかけました。

村民一人ひとりが交通ルールを守り、交通事故の防止に努めましょう。また、九月二十一日から三十日まで「夕やみに　見えぬ人影　ひそむ事故」をスローガンに秋の全国交通安全運動が実施されます。


交通安全を呼びかける浅見村長

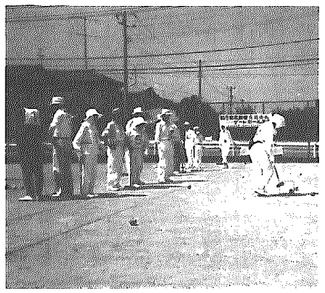
第8回交通安全協会長杯争奪ゲートボール大会　横越　新勝会チーム優勝

七月二十六日に亀田町町民グランドで第8回交通安全協会長杯争奪ゲートボール大会が行われ、横越村の新勝会チームが優勝しました。

この大会は、高齢化社会を迎え、高齢者の関係する交通事故死が三割を超える状況であることから、高齢者の方の交通安全意識の高揚をはかることを目的に開催されています。

当日は炎天下のもと新潟南署管内から集まった強豪二十チーム百五十名が、日頃鍛えた技を競い合いました。

新勝会チームは九月五日に開かれる県大会に出場します。御健闘を祈ります。



「阿賀の里づくり・よこごし」発足式

八月二十二日ＪＡ横越村で「阿賀の里づくり・よこごし」（横越村農業農村活性化推進機構）が発足しました。

村では今年度から農業農村活性化農業構造改善事業を実施していますが、この事業はカントリーエレベーター等の近代化施設の整備、消費者との交流、イベントの開催などを通じて、村の環境や文化を含めた地域全体の活性化をめざすものです。

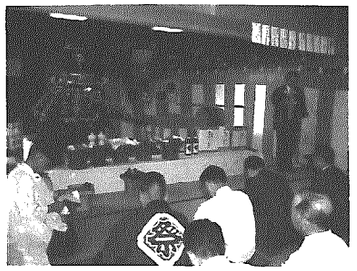
「阿賀の里づくり・よこごし」は横越村に合った独創的、自発的な取り組みを行うことにより、この事業を推進させようとする組織です。

ヘッドマスターには元横越小学校長の渋谷実氏を迎え、農業関係者に限らず、さまざまな分野の方からなる三十三名の委員で構成されています。

委嘱状を受ける渋谷ヘッドマスター

発足式の後は、中之島つくろう塾の総括指導員半藤禅一氏から「まちづくり・むらづくり・よもやまばなし」という題目で記念講話がありました。

宝くじ助成事業で子供神輿を購入



藤駒公民館（館長串田修平）では、地域づくり、ふれあい活動の一環として、平成六年度宝くじ助成事業（一般コミュニティー助成事業）を受け、子供神輿を購入しました。

事業費総額は三百四十七万五千円（うち助成額二百五十万円）

購入備品は次の通り。

一、子供神輿　一基
一、法被　七十枚
一、弓張提灯　六灯

八月二十一日には購入した備品のお披露目式が盛大に行われました。

式典では「この子ども神輿が子ども達に夢と希望を与えるとともに、藤山、駒込地区の親睦を深め、地域おこしの核として期待される」と挨拶がありました。

式典の後、神輿行列が藤山、駒込集落を練り歩きました。

横越中央商店会　名入れ提灯を製作

村では住宅団地の開発、国道四十九号線の歩道整備など快適な住環境整備をすすめ、町制施行を見据えたまちづくりをしていますが、それに見合った商店街を整備するため、昨年六月横越中央商店会が結成されました。

今年度は商工会と共催で包装技術講習会を八月に開催したほか、会の共通シンボルとして名入れ提灯をつり下げることにより中央商店会の宣伝を行おうというものです。

名入れ提灯で会をピーアール

のぎくの家夏まつり

模擬店の売り子もボランティア

横越上にある重度視覚障害者施設「のぎくの家」で八月二十日夜夏まつりが行われました。

このまつりも今年で五回目を数え、子どもから大人までが気軽に参加できる地域に溶け込んだ行事となりました。

午後七時からは地元横越上子ども達による郷土芸能や、マジカルパペットショー（人形劇）、合唱団のぎくによるミニコンサートなど多彩な催し物に三百人を越える人出でした。

食べ物や我楽多市、金魚すくい、くじなどの模擬店は行列が出来るほどの大盛況。

会の代表である小野塚テイ子さんは「のぎくの家、のぎく夏まつりを通して地域の人から一人でも多く、福祉をもっと身近にとらえて貰えたら嬉しい」と話してくれました。

稲わらは焼却せずに土づくりに有効利用

稲わら等の秋すき込みのすすめ

土づくりは農作物の栽培の基本ですが、水田における用排水施設の整備等により乾田化が進んだことにより、土壌の有機物の減少が進んでいます。そのため、有機物の補給が必要となります。

稲わらのすき込みと堆肥の比較試験を行った結果は同等の生育・収量が得られました。また、すき込み時期は地温の高い十月中旬までが好ましいとされています。

稲わらの焼却の弊害

近年稲わらの焼却が生活環境に及ぼす影響指摘されています。稲わらの焼却により発生する煙で目の痛みや交通に支障を及ぼすこともあることから、年々苦情が多くなっています。また、健康被害等についても各分野で指摘されつつあります。

かつては純農村であった横越村も今では住宅団地の造成により、急速に都市化しつつあります。快適な住環境を守るためにも稲わらは焼却せずに土づくりに有効利用ください。